外国語教育メディア学会（LET）
中部支部
外国語教育基礎研究部会

×

中部地区英語教育学会
（CELES）

2015 年度

中部地区卒業論文・修士論文発表会

発表プログラム・予稿集

日時　2016 年 2 月 27 日（土）
会場　名古屋学院大学 名古屋キャンパス 白鳥学舎 曙館
〒456-8612 愛知県名古屋市熱田区熱田西町 1 番 25 号
共催　外国語教育メディア学会（LET）中部支部 外国語教育基礎研究部会
中部地区英語教育学会（CELES）

Twitter ハッシュタグ：#chubu_sotsushu2015

お問い合わせ先：
外国語教育メディア学会（LET）中部支部
外国語教育基礎研究部会 事務局
川口 勇作（名古屋大学大学院生）
y.kawaguchi@nagoya-u.jp

ごあいさつ

2015 年度中部地区卒業論文･修士論文発表会開催に寄せて

早瀬 光秋

中部地区英語教育学会会長･三重大学

外国語教育メディア学会中部支部外国語教育基礎研究部会との共催で 2015 年度中部地区卒業論文・修士論文発表会をここに開催できますことを喜ばしく思います。また、昨年度から「外国語教育基礎研究部会」が行ってこられた卒業論文・修士論文発表会の実績を引き継ぐかたちで、このように共催できることを嬉しく思います。これまでの発表会に関わってこられた方々に厚く御礼申し上げます。

発表者の皆さんにとりましては、この発表会がこれまでの研究の集大成としての場となればと思います。また、発表を通して参加の方々と意見交換をしていただき、お互いに学び合っていただくことを希望します。これを機に更なる研究の深化発展を目指していただければ幸いです。今後卒業論文・修士論文を書く学生・院生さんにとっては、先輩の方々の研究発表から研究内容・研究方法等について示唆を得て、自らの考えを客観的に見る機会になるものと確信しています。そして、是非来年度の発表を目標に論文執筆を進めてください。

今回の開催につきましては、当初発表者の数が少なく心配していましたが、
最終的に 17 名の学生・院生さんから応募があり感謝の思いでいっぱいです。皆さんの発表を楽しみにしています。

最後になりましたが、今発表会の担当・運営の方々に感謝の意を表しますとともに、今後、外国語教育メディア学会中部支部と中部地区英語教育学会との協力関係が深まることを強く望んでいます。

プログラム

12:10-

受付（5 階 502 室前）

12:40-12:45

開会行事（5 階 502 室）

司会：　西村 嘉人（名古屋大学大学院生）
挨拶：　田村 祐（外国語教育基礎研究部会 部会長）

12:50-15:40

研究発表

第一室（5 階 502 室）

12:50-13:20　卒業論文発表
CLIL（内容言語統合型学習）実践授業における子どもの内容への興味：
他教科（社会）の視点から 1
松原 惇文（大阪教育大学学生）

13:25-13:55　卒業論文発表
音読・シャドーイングは 4 技能統合に有効か 2
杉山 友希（南山大学学生）

14:00-14:30　卒業論文発表
フォーカス・オン・フォームを取り入れた小学校英語：
Teacher Talk, Teacher-Child の発話分析から 3
半田 智彦（大阪教育大学学生）

14:35-15:05　修士論文発表
協同学習を取り入れたリーディング授業：学習者の意識および動機づけへの影響 4
山田 秀子（名古屋学院大学大学院生）

15:10-15:40　修士論文発表
CLIL 授業における子どもの言語面での学びと思考：
授業におけるディスコース分析をとおして 5
中村　愛（大阪教育大学大学院生）

第二室（5 階 515 室）

12:50-13:20　修士論文発表
英語教育における翻訳評価の再考：“ a young girl”は「少女」か？ 6
守田　智裕（広島大学大学院生）

13:25-13:55　修士論文発表
高校生における CLIL 授業実践と英語力向上について：オーストラリア語学研修をとおして 7
森下　裕美子（大阪教育大学大学院生）

14:00-14:30　卒業論文発表
現在完了の使用法 8
渋谷　茉由（三重大学学生）

14:35-15:05　卒業論文発表
小学校英語教科化に向けた中学年指導の在り方：児童の発達段階に着目して 9
早川　空（大阪教育大学学生）

15:10-15:40　修士論文発表
日本人 EFL 学習者の文法理解に必要な要素：
言語分析能力（L1/L2）との相関からみる分析 10
中村　光輝（静岡大学大学院生）

第三室（5 階 516 室）

12:50-13:20　卒業論文発表
Elementary School English Education in Japan and Other Countries 11
ARAKI, Mayu（Undergraduate Student, Jin-ai University）

13:25-13:55　修士論文発表
Effects of Negotiation of Meaning on Lexical Acquisition
in Computer-Mediated Communication 12
ZHANG, Hongxu（Graduate Student, Nagoya University）

14:00-14:30　修士論文発表
Examining Japanese Teacher's Use of L1 in English Classes: Frequency, Function and Reasons Behind Them.....13
IZUMITANI, Tadashi（Graduate Student, Nara University of Education）

14:35-15:05　修士論文発表
第二言語語彙習得における受容的・産出的探索練習の効果：英語擬似単語と手の動きの組み合わせ学習に関して.....14
柳沢　明文（信州大学大学院生）

15:10-15:40　修士論文発表
理学療法士を調査対象にした ESP ニーズ分析：調査結果を養成校の英語教育につなげるために.....15
小林　信子（名古屋学院大学大学院生）

第四室（5 階 517 室）

12:50-13:20　卒業論文発表
PPP や TBLT で日本の中学生に英文法を教える方法.....16
石橋　征典（三重大学学生）

13:25-13:55　卒業論文発表
小学校外国語活動で生きるティーム・ティーチングの在り方：HRT と ALT へのインタビュー分析を中心に.....17
千足　菜津紀（大阪教育大学学生）

卒業論文・修士論文発表 タイムテーブル（略題）

	第１室（502 室）	第２室（515 室）	第３室（516 室）	第４室（517 室）
12:50-13:20	CLIL 実践授業における子どもの内容への興味（松原）	英語教育における翻訳評価の再考（守田）	Elementary School English Education in Japan and Other Countries (Araki)	PPP や TBLT で日本の中学生に英文法を教える方法（石橋）
13:25-13:55	音読・シャドーイングは４技能統合に有効か（杉山）	高校生における CLIL 授業実践と英語力向上について（森下）	Effects of Negotiation of Meaning on Lexical Acquisition in CMC (Zhang)	小学校外国語活動で生きるティーム・ティーチングの在り方（千足）
14:00-14:30	フォーカス・オン・フォームを取り入れた小学校英語（半田）	現在完了の使用法（渋谷）	Examining Japanese Teachers' Use of L1 in English Classes (Izumitani)	
14:35-15:05	協同学習を取り入れた英語リーディング授業（山田）	小学校英語教科化に向けた中学年の指導の在り方（早川）	第二言語語彙習得における受容的・産出的検索練習の効果（柳沢）	
15:10-15:40	CLIL 授業における子どもの言語面での学びと思考（中村愛）	日本人 EFL 学習者の英文法理解に必要な要素（中村光）	理学療法士を調査対象にした ESP ニーズ分析（小林）	

15:45-15:55

閉会行事（5階502 室）

司会：　西村 嘉人（名古屋大学大学院生）
講評：　早瀬 光秋（中部地区英語教育学会 会長）

18:00-21:00

懇親会

事務局から

発表会終了後の講演会について

発表会終了後，16 時より，外国語教育基礎研究部会の第三回年次例会の基調講演が催されます。『否定フィードバックの言い直し（recasts）について考える』というタイトルで，酒井英樹先生（信州大学）にお話いただきます。事前申し込み，参加料等は不要ですので，皆様ふるってご参加ください。

本日のお食事について

本日は，会場内では食事をとることのできる店舗，購入することのできる店舗は営業しておりません。予めご了承ください。なお，会場の西側に出ていただくと，コンビニエンスストアや，食事をとれる店舗が数軒ございます。

懇親会について

本日の例会終了後，18 時より，懇親会を開催いたします。受付にて参加のお手続きをお済ませください。例会終了後に担当者が会場までご案内いたします。

卒論修論発表

予稿

CLIL（内容言語統合型学習）実践授業における子どもの内容への興味
―他教科（社会）の視点から―

松原 惇文
大阪教育大学学生

Keywords：CLIL，社会科，子どもの興味・理解

1. 研究の目的

CLIL とは，Content and Language Integrated Learning の略称である (以下，CLIL)。CLIL とは，教科科目などの内容とことば (目標言語) を統合した学習を意味する。本研究では，外国語活動における子どもの内容への興味・理解は CLIL の授業を実践することによって深まるのかどうか，授業実践を通して他教科の視点から検討する。

2. 研究の方法

CLIL の教材開発を行い， 大阪府の公立小学校 5 年生 (N = 27) の授業実践における児童のワークシート，授業ビデオ， アンケートを分析する。授業者は筆者である。図 1 は，授業後に生徒を対象に行った選択記述式アンケートの集計結果の平均値を示したものである。Q1.では，授業の楽しさを，Q2 では内容を知ることができたかを，Q3 では，CLIL の授業をもっとしてみたいと思うかをそれぞれ「とてもそう思う・まあそう思う・あまりそう思わない・そう思わない」の 4 つの選択肢の中から生徒に回答してもらった。

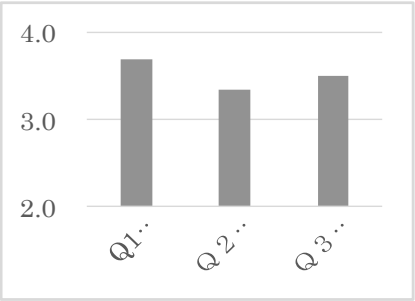

図 1. CLIL 知識理解について

3. 結果と考察

教材開発は『Where do animals live in? 』(社会科の CLIL 授業) で， 授業の目標は， (1) 各国に生息している生き物の名前を英語で理解する (言語)， (2) 生き物の生息している大陸と海抜からの標高を知ることによって，世界中に生息する生き物について興味・関心を持つ (知識・理解) である。本授業実践後の生徒を対象に行ったアンケート結果から，生徒全体のうち，100%の生徒が「授業はとても楽しかった・まあまあ楽しかった」と回答しており，また，約 88%の生徒が「国や動物の名前を英語で知ることがよくできた・だいたいできた」と回答した。この結果から，大半の生徒は本時の授業のねらいである各国に生息している生き物の名前を英語で理解する，という言語目標を達成することができたと証明することができる。また，記述式回答からは「いつもは英語が嫌いだけど今日は楽しかった」，「また，この授業をしたいです」等の意見を聞くことができた。

4. 結論

本研究におけるリサーチ・クエスチョンは， (1) CLIL を取り入れることにより児童の外国語活動への興味を深めることは可能か， (2) CLIL を取り入れることにより児童の理解を促進することは可能か，というものであった。生徒を対象に行ったアンケート結果から，外国語活動に CLIL を取り入れることにより，授業内容への興味を深め，内容理解を促進することは可能であるということが明らかとなった。

参考文献

笹島茂 (2011).『CLIL 新しい発想の授業：理科や歴史を外国語で教える!?』三修社.

音読・シャドーイングは 4 技能統合に有効か

杉山 友希
南山大学学生

Keywords: 音読，シャドーイング，4 技能統合

1. はじめに

2013 年に学習指導要領が改訂され，日本の英語教育は転換期を迎えた。文部科学省（2010）は，これからの日本の英語教育は，従来の文法訳読式ではなく，コミュニケーション能力の伸展および 4 技能統合を重視すべきだとした。それにより，4 技能統合に向けた指導法として，音読やシャドーイングがますます注目を集めるようになった（Mori, 2011）。しかし，その効果については疑問が残る。本研究では，英語を第二言語として学ぶ日本人の中学生から大学生を対象にした先行研究のレビューを行い，音読やシャドーイングの 4 技能への効果について考察を行う。

2. 音読

音読には個人読み，一斉読み，リッスン・アンド・リピート，リード・アンド・ルック・アップなど様々な種類がある（鈴木寿一， 2012）。Miyasako（2009）は，高校生に対し個人読みの指導を行った結果，読解テストの成績が伸びたと報告している。一方，スピーキング（e.g.高山，2009；飯野・薮田，2013）やライティング（e.g. 大八木，2001）にはあまり効果がない。

3. シャドーイング

シャドーイングは聴解能力向上に効果があるとしている研究が多い（e.g. Onaha, 2004; 玉井，2005；Miyake, 2009）。また，スピーキングにおいてシャドーイングが最も効果のある方法とは言えないものの，発話量を増やす効果があり（飯野，2014），音読と組み合わせたりすることでより強い効果を得られる（Mori, 2011）。

4. 考察

上述の研究および音読とシャドーイングを比較した研究（Kuramoto, Shiki, Nishida, & Ito, 2007; 鈴木久実，2007; Shiki, Mori, Kadota, & Yoshida, 2010）より，音読は読解に，シャドーイングはリスニングとスピーキングに効果があるといえる。また，熟達度が低い学習者により効果があるとする研究があるが（玉井，2005; 鈴木久実，2007; Miyasako, 2009），これは，音読やシャドーイングによって，熟達度の低い学習者が苦手とする音韻符号化（phonological encording）が促進され（門田，2007），言語学習が容易になっている可能性があると考えられる。

フォーカス・オン・フォームを取り入れた小学校英語
—Teacher Talk, Teacher-Child の発話分析から—

半田 智彦
大阪教育大学学生

Keywords: CLIL, teacher talk, 授業後アンケート分析

1. 研究の目的

研究の目的として，教師が授業内で使用する teacher talk が学習者である子ども達にどのような影響を与えるのか，ということを設定し考えていきたい。その為に，(1)英語を学習する子ども達が teacher talk をどれくらい理解できているのか，(2)子ども達は teacher talk を授業内容理解に役立てることができているのか，という 2 点を，CLIL を用いた実践授業を行うことを通して考察し述べていく。

2. 研究の方法及び実践

(i) 良い teacher talk が使用されている授業の分析について，CLIL(Content and Language Integrated Learning 内容言語統合型学習)の第 1 人者であるイタリア，ピネローロ市立シルコロ小学校で英語指導を担当されているシルヴァナ・ランポーネ氏(Ms. Silvana Rampone)の「フルーツ」の授業を訪問観察し，分析（ディスコース分析）を行い，使用されている teacher talk を見本として捉えていく。(ii) 小学校での筆者の授業実践後のアンケート分析について，N 市立 K 小学校 6 年生 35 名に授業させて頂いた「経済（流通）」に関する筆者の授業分析，子どもの対話，アンケート分析を行う。

3. 結果と結論

アンケートは，質問 1~4 で構成し，それぞれ teacher talk の予想しやすさ，使用した絵本の内容の予想のしやすさ，質問 1 及び 2 の予想することに役立ったヒント，授業後の感想は自由記述式で記入という形にした。アンケート結果から，質問 1 及び 2 の相関関係はスピアマンの相関係数（$N = 35$, $r_s = .59$, $p = .0002$**）が示す通り，質問 1 に肯定的だった子どもは質問 2 にも肯定的な傾向が伺えた。質問 1 及び 2 の自己評価が高かった子どもは，質問 3 の意味理解にチェックしている子どもが多く，授業の意味にアクセスできていたと考えられるのではないか。逆に両質問の自己評価が低かった子どもの質問 4 の記載内容を見てみると，「絵が苦手。」「お金の知識があった。」「授業が楽しかった。」としており，授業内容の推測が出来ないからといってそれが授業についてこれていない，ということに繋がらないことが判明した。

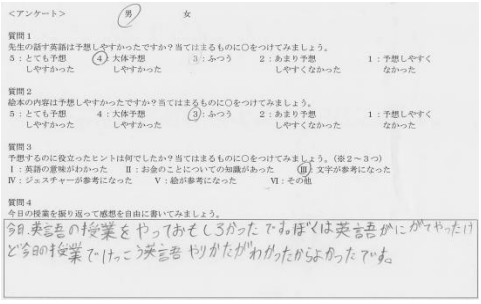

図 1. アンケート

参考文献

VanPatten, B., & Cadierno, T. (1993). Input processing and second language acquisition: A role for instruction. *The Modern Language Journal, 77*, 45–57.

協同学習を取り入れた英語リーディング授業
―学習者の意識および動機づけへの影響―

山田 秀子
名古屋学院大学大学院生

Keywords: 協同学習, リーディング, 動機づけ

1. はじめに

日本の教育界では現在アクティブ・ラーニングが推進され，学習者主体の能動的・協働的な学びの実践に重点が置かれている。具体的な指導方法の1つにグループ・ワークやディスカッションが挙げられており，小人数グループでの学び合いによる協同学習に注目が集まっている。協同学習は学業，学習意欲，社会性などの側面にさまざまな効果があることがこれまでの研究から分かっており，期待が寄せられているが，それらの効果を得るには指導者が協同学習の基本理念を十分に理解した上で実践経験を積む必要がある。

語学教育ではペアやグループで学習する機会は多いが，リーディング授業に関しては教師主導の講義形式が多く用いられているようである。本研究では，協同学習を取り入れた英語リーディング授業を計画・実践し，学習者が協同学習に対してどのような意識を持つのか，また協同学習が学習の動機づけにどのような影響を及ぼすのかを調査した。

2. 方法

専門学校生 46 名（初級～準中級の 3 クラス）を対象に，協同学習のメソッドの 1 つであるケーガン・ストラクチャ（Kagan, 2009）を使用した授業を 10 週にわたって実施した。協同学習の理念（互恵的な協力関係，個人の責任，参加の平等性，活動の振り返り他）に基づいて授業を構成し，学習者は毎回ペアや 4 人グループの単位で学習した。

授業実践の前後に質問紙調査を実施した。質問紙は「英語学習者に関するアンケート」（Dörnyei & Taguchi, 2010）および「グループワークについてのアンケート」（Fushino, 2008）から項目を選択して作成した。また，質問紙調査の回答と英語習熟度をもとに 4 名を選んで面接を行った。

3. 結果とまとめ

協同学習に対する学習者の反応は概ね肯定的であった。自分の考えを言葉にする，仲間と知識・方略を教え合う，意見を交換するなどの協同的な学びが，学習内容の深い理解，知識の構築，社会的・対人スキルの向上などに役立つと認識している傾向が高いことが示された。一方で，講義の利点も認め，協同学習と講義の両方を取り入れた授業が好ましいと考える学習者が多いこともわかった。

動機づけは自己決定理論・有機的統合理論の枠組みで捉えた。全般的に上昇がみられ，特に内発的動機づけが有意に高まった。外発的動機づけは習熟度によって傾向が異なった。準中級レベルでは自律度が高い統合的調整と同一化調整が高まり，初級レベルでは自律度が一段階低い取り入れ調整が高まった。習熟度別のクラス編成であるため，グループの成員が均質であったことが一因であると考えられる。

参考文献

Dörnyei, Z., & Taguchi, T. (2010). *Questionnaires in second language research: Construction, administration, and processing* (2nd ed.). New York, NY: Routledge.

Fushino, K. (2008). *Measuring Japanese university students' readiness for second language group work and its relation to willingness to communicate* (Doctoral dissertation).

Kagan, S., & Kagan, M. (2009). *Kagan cooperative learning*. San Clemente, CA: Kagan publishing.

CLIL 授業における言語面での学びと思考
―授業におけるディスコース分析をとおして―

中村 愛
大阪教育大学大学院生

Keywords: CLIL, Focus on Form, discourse

1. はじめに

全国の公立小学校における外国語活動の全面実施から 4 年以上が経ち，文部科学省の提言（文部科学省，2014）では，これまでの外国語学習の課題として，コミュニケーション能力の育成に課題が残ると述べてられている。また，高学年の知的能力に合った教材に関する課題もある。これらの現状と課題を踏まえ，コミュニケーション能力の育成を進捗し，さらに児童が内容に興味を持ち，満足できるような題材を用いた授業を目指す。それと合致した教授法として，1990 年代にヨーロッパで広まり，現在もなお研究が進められている内容言語統合型学習（CLIL：Content and Language Integrated Learning）に注目する。CLIL とは 4 つの C，Content（内容），Communication（言語学習と使用），Cognition（思考），Community（文化）のフレームワークがあり，本研究では特に，Cognition（思考）について着目する。本研究では，主に真のコミュニケーションや CLIL，フォーカス・オン・フォーム（FonF），ティーチャートークについて記述し以下の目的・方法で行う。

2. 研究の目的

フィンランド・スウェーデン・イタリア・日本の 4 カ国の公立小学校にて，FonF を取り入れた CLIL の授業実践を行う。この実践において，L2（英語）そのものの学びや理解，FMCs が起きるような教師のティーチャートークを練り，児童のつぶやきを引き出す工夫を行う。CLIL における英語の理解度・思考・発話についてまとめ，思考と言語の絡み合わせ（intertwine）の場面を見極め，小学校の年齢における CLIL の可能性と日本での応用を探る。

3. 研究の方法

（1） 海外（フィンランド等）において CLIL 授業実践とディスコース分析を行う。
（2） （1）の授業後にアンケート（5 件法）を行い，日本の小学校で応用できる点を分析する。
（3） 海外（イタリア等）において，授業実践内容を工夫し，日本の高学年でも実践を行い，その際のディスコースから日本への応用を考察する。

4. 分析と結果

ディスコース分析より，低次思考力（LOTS：Lower-Order Thinking Skills）や高次思考力（HOTS：Higher-Order Thinking Skills）に分類し，特に実験の場面では思考のプロセスが多く見られた。また，児童の発話と行動の様子から，発話量は少ないが児童自身が考え行動している様子が見られた。さらに母語の介入が必要な場面では学級担任に介入してもらい，児童のつぶやきを引き出すためのティーチャートークも先行研究でのティーチャートークを参考に分類し，分析した。アンケート分析からは，発話数と理解度の関係，日本の小学校の年齢における CLIL 応用の可能性が明らかになった。アンケートでは理科 CLIL で扱った語彙の理解度クイズを行い，背景の異なる 3 校（X，Y， Z）を一元分散分析で比較すると有意差がないことが分かった。英語の習熟度にあまり影響されず，教科特有の語彙を理解していたといえる。ディスコース分析から発話数が少なかった Y 校がアンケート分析では理解度が高かったり，クラス全員がとても楽しかったと回答し発話量が最も多かった X 校がアンケートでは理解度が低かったりする結果が見られ，教材やティーチャートークの工夫をすれば，CLIL の日本の小学校への応用で気を付けることが示唆された。

英語教育における翻訳評価の再考
― “a young girl” は「少女」か？―

守田 智裕
広島大学大学院生

Keywords: 翻訳評価, 質的記述, 複数性

1. はじめに

本発表は, 筆者が執筆した修士論文の一部の内容を用いて再構成したものである。

2. 背景

英語教育において訳の位置づけが見直されつつある (Cook, 2011; Laviosa, 2014) 。日本において「訳」は, 辞書や文法書等の訳出公式で訳出する「英文和訳（置換え訳）」と, 発話者の心身状況を考慮して原典で理解した内容を日本語で再表現する「翻訳」に分類され, 「翻訳」に思考力育成やメタ言語意識の涵養といった独自の教育的意義を認める流れがみられる。ただし訳の評価に関しては議論の余地がある。従来の訳評価は, 「英文和訳」の評価として, 訳文の正確さのみが点数化されたが, 訳文を「翻訳」として評価する際には, 正確さ以外にも適切さや自然さを観点に含めた評価枠組みが提案されている (石原, 2010) 。

しかし, 翻訳文を「客観的」な形で点数化する必要があるのだろうか。Arendt (1981) は, 公的空間である現実世界において「客観的」基準が存在することは想定できず, むしろ観点や位相が異なる他者が複数集まることで各々が合意・納得できる見方を徐々に共有できると述べている。これを翻訳の評価に当てはめれば, 単一の評価規準によって翻訳文を評価するのではなく, 見方や立場の異なった複数名が評価することで、徐々に各々の見解が共有されることになる。本発表は, 上で述べたような Arendt の議論を援用した翻訳評価の一例を提示する。

3. 学部生と翻訳評価者の語り

協力者は, 英語教育専攻の学部生 (仮名：よし子) と翻訳経験者 2 名 (仮名：さとし・Jack) である。題材は *New Horizon English Course 3* に掲載されている “A Mother’s Lullaby” である。まずよし子に翻訳するよう依頼し, (1) 読み手が上級英語学習者であること, (2) 自然な日本語にすること, (3) 情景を踏まえること, を伝えた。その 1 週間後に翻訳文を提示し, 刺激再生法を用いて訳出の際に考えていたことを説明するよう依頼した。その後, 翻訳経験者であるさとしと Jack に, よし子の翻訳文および訳出の説明を提示し, それらに関して評価をするように伝えた。評価の観点は特に指定せず, 各々の観点で気がついたことを述べてもらうよう依頼した。以下, 本文中の “a young girl” という名詞句をどのように訳出したか, またその訳出がどのように評価されたかという点について簡潔に記述する。

訳した当人であるよし子は, “a young girl” を「少女」と訳出した。その理由として、 “a little boy” という別の登場人物との人間関係が表現されるように, “a young girl” を「少女」とし, “a little boy” を「男の子」と訳すことで, “a young girl” が幼い存在でありながらも同時に大人びているという印象を読者に与えようとしたと述べた。

さとしは, 「少女」という日本語がこの流れでは自然ではないと評価した。さとしは「身体的に」翻訳を考えるという信念を有しており, 実際に口に出して確認をし,『牧場の少女』に代表されるように「少女」が和訳調であると指摘した。それに対して Jack は, 文学作品としてのミステリー性を表現するためにも, 「少女」という訳語が適切ではないと述べた。つまり, 物語の途中までは“a young girl” が男の子の実の母親なのかそうでないのかが不透明であるため, 「少女」と訳出することでそのあいまい性が失われてしまうと指摘した

このように複数の観点から翻訳文が評価されることで、学習者が自身の翻訳文の問題点を自覚することが期待される。

高校生における CLIL 授業実践と英語力向上について
―オーストラリア語学研修をとおして―

森下 祐美子
大阪教育大学大学院生

Keywords: 高校生の CLIL， オーストラリア語学研修， 英語力

1. はじめに

CLILとは,「教科を語学教育の方法により学ぶことによって効率的かつ深いレベルで修得し，英語を学習手段として使うことによって実践力を伸ばす教育法」である (渡部他，2011)。以下4点を研究目的とする。オーストラリアでCLIL実践授業を主体的に生徒が行うことが， (1) 英語力に変容が見られるのか， (2) その変容が生徒の情意面や「書く力」につながるのか， また， 日本でCLIL実践授業を主体的に生徒が行うことが， (3) 英語力に変容が見られるか， (4) その変容が生徒の情意面や「書く力」につながるのか， 検証する。

2. 研究方法

実践1：日本の高校2年生がオーストラリアの高校2年生に対して、CLIL(理科物理:表面張力分野)による授業を行ったグループ (CLIL群，N = 13) と， 行わなかったグループ (Non-CLIL群，N = 25) における事前・事後の英語力・情意面・「書く力」がどう変容したか， (1) 英語学力テストにおける比較， (2) 英語ライティングの質的変容を観察し， (3) 質問紙調査分析を行った。

実践2：日本の高校2年生が日本の生徒にCLIL（理科物理:屈折分野）の授業を行い， CLIL群 (N = 78) とNon-CLIL群 (N = 72) における事前・事後の英語力・情意面・「書く力」がどのように変容したか， (1) 英語学力テストにおける比較， (2) 英語ライティングの質的変容を観察し， (3) 質問紙調査分析を行った。

3. 研究結果

豪州で授業を実践した生徒 (CLIL群) の英語学力テストにおける事前と事後，従来型で授業を行わなかった生徒 (non-CLIL群の生徒) の英語学力テストにおける事前と事後の得点をそれぞれ比較し， データ分析を行った。その結果， 上位群 (CLIL群， N = 4， Non-CLIL群， N = 15) のトータルにおいて事前と事後の変容が見られた (表1)。豪州で受動的に英語を享受する生徒に比べて， 自主的に英語を使い (Communication)， 理科分野を説明しながら (Content)， 豪州の生徒に予測させて (Cognitive)， その内容を社会へと帰依させる (Community) 生徒の方が英語学力テストの結果を見る上で生徒の英語力向上に関わりが深いことが分かった。日本の高校生 (N = 150) におけるCLIL実践に関する一連の結果については発表で報告する。

表1. Non-CLIL群とCLIL群のGTECテスト結果

上位群 (CLIL N = 4，Non-CLIL N = 15)				
	事前テスト		事後テスト	
	統計値	p値	統計値	p値
Reading	2.50	.01**	2.11	.03*
Listening	0.90	.37	1.90	.06
Writing	1.41	.16	1.56	.12
Total	1.95	.05	2.40	.02*

Note. N = 19， *p < .05， **p < .01　　マンホイットニーU 検定

引用・参考文献

渡部良典・池田真・和泉伸一 (2011).『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たなる挑戦第1巻原理と方法』上智大学出版.

現在完了の使用法

渋谷 茉由
三重大学学生

Keywords: 経験, 結果, 継続

1. 現在完了の本質

この章では，現在完了の本質を過去形と比較しながら考察する。この論文では，現在完了の本質を，「現在との関連をもつ過去の出来事や状態を表すもの」として取り上げる。そしてその意味合いを「経験」,「結果」,「継続」の 3 つの用法に区分する。「経験」は,「出来事動詞」で表される事象が，不定の時に起こったことを表す。「結果」は,「出来事動詞」で表される事象が，現在に関わりをもつことを表す。「継続」は,「状態動詞」や「出来事動詞」で表される事象が，現在まで続くことを表す。一方で,「過去形」の本質は,「現在との関連をもたない出来事や状態を表すもの」,「話者が特定の時をもつもの」である。まとめとして，現在完了と過去形の根本的な違いについて明確にし，2 章で扱う「現在完了を教える上での諸問題」に繋げていく。

2. 中学校で現在完了を教える上での問題

この章では，中学校で使用される教科書中の現在完了の導入の仕方について取り上げ，その問題点を提示する。教科書の導入方法については，現在完了の 3 つの用法の学習順序について触れる。また，それぞれの用法を表した図，用いられている例文についても吟味する。「経験」と「結果」の例文に「出来事動詞」が使用されているか，また,「継続」の例文で用いられる動詞が「状態動詞」であるか調査する。それに加え，3 つの用法についての説明が，現在完了の本質を捉えているか，現在完了と混同しがちな「過去形」との違いが明瞭であるかについて考察する。

3. 現在完了の教え方

この章では，現在完了の本質，それぞれの用法の教え方に加え，その導入順序を提案する。まず，現在完了の本質の理解を促す問題を提示する。次に，教科書の問題点を踏まえ，それぞれの用法の説明の仕方，過去形との違いを明確にする導入方法を提案する。それらに加え，共に使われる頻出の副詞 (twice，already，since など) についても扱う。最後に，現在完了を扱う上で,「継続」,「結果」,「経験」の順で導入することを提案する。その根拠については，それぞれの用法を表した図や，それぞれの用法が,「現在との関連をもつ過去の出来事や状態を表すもの」であるかをもとに述べていく。

小学校英語教科化に向けた中学年指導の在り方
―児童の発達段階に着目して―

早川 空
大阪教育大学学生

Keywords: 小学校中学年, 絵本, 発達段階（臨界期）

1. はじめに

本研究の目的は現在文部科学省から小学校高学年での英語の教科化，中学年からの外国語活動の時間増加に伴い教員・児童双方の立場に立ち，中学年からの英語教育について考える。また，小学校中学年から英語の授業を取り入れることについて，教育現場での経験が深い教員の意見を交えながら，自身の実践を通して，小学校中学年の発達段階的特徴に応じた指導内容を考える。

2. 研究の方法と実践

①中学年の発達段階に合った教材作りと模擬授業の実践，②実際に小学校へ赴き，英語の授業を実践「We're Going on a Bear Hunt」（ビデオ分析），③N 市の小学校英語に関して経験豊富な教員 5 名にアンケートを依頼，分析。④アンケート結果から特徴的な点について，自治体の指導主事にインタビューを実施。

3. 結論

研究の結果，中学年でのメリットや特徴，発達段階について様々なことがわかった。主に (1) 模倣や反復を苦にしない, (2) 全体的処理や身体を動かすことが得意, (3) 物怖じをしない, (4) ペアやグループを作りやすい等であった。一例ではあるが，アンケートの集計（図 1）より特にペアやグループを作りやすいという項目については中学年の数値が一番高くなっている。ペアやグループを作った際にもある程度の議論がなされ, 男女を意識せずにペアやグループを作るということが容易にしやすいということがわかった。また，インタビューより，中学年では他の教科と関連させることや，考えさせること，友達と何か交流するということが比較的行いやすいという意見もあった。筆者の授業実践からはジェスチャーを行う場面で，絵本に出てくるジェスチャーを児童自らが，グループ内の他の児童と相談しながら考え、楽しそうにジェスチャーを行っている姿が見られた。また，ジェスチャーをグループ内で考える時間に，児童がその動作の英単語を何度も口ずさんでいる様子も見られた。以上が研究の結果でわかった主な中学年のメリットや特徴である。指導内容としては体を動かすのが得意ということと合わせて，実践を通してジェスチャーを楽しそうに考えていることからジェスチャーを取り入れた活動が好ましいと考えられる。また，物怖じをしないこととペアやグループワークを作りやすいということからペアやグループ活動や発表する機会を多く取り入れた活動をすることが望ましいと考えられる。以上が研究の結果でわかった中学年の発達段階に応じた指導内容である。

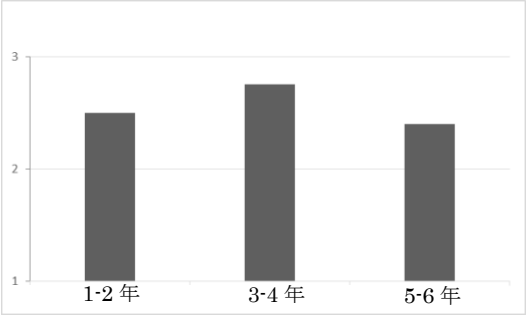

図 1. ペアやグループを作りやすい

日本人 EFL 学習者の英文法理解に必要な要素
―言語分析能力(L1/L2)との相関からみる分析―

中村 光揮
静岡大学大学院生

Keywords: language analytic ability, MLAT, grammatical comprehension test

1. はじめに

同じ教室環境や同程度の時間数の学習をしていても，英語の学習効果には個人によってばらつきがある。その要因のひとつとして考えられるのが，言語適性である。言語適性についてまだ明らかにされていないことは多く，学習者のどういった言語能力を言語適性と呼ぶのか，具体的に言語のどういった側面に影響するものなのか，定かではない。そこで，言語適性のうち最も学習効果に影響する (Mukoyama, 2012) とされる言語分析能力に着目して，言語分析能力がどのようにして文法理解に関連しているのかを調べた。

2. 研究課題

Skehan (1998) によると言語適性とは，音韻的能力 (Auditory ability)，言語分析能力 (Language analytic ability)，記憶力 (Memory ability) の総称である。そのうち言語分析能力は「言語ルールを推論したり，一般化をする能力」(Skehan, 1998) と定義されている。言語適性を測定する代表的なテストに MLAT (Modern Language Aptitude Test) (Carroll & Sapon, 1959) があるが，言語分析能力を測るに妥当なテストなのかという疑問が多い (Skehan 2002; Roehr 2013)。言語分析能力に関する先行研究の問題点を整理すると，MLAT では言語分析能力を測るには不十分であること，言語分析能力と文法理解能力の相関をみる先行研究や，L1 と L2 における言語分析能力の比較をした研究が不足していることが指摘できる。

以上のことから，本研究では次のことを研究課題として設定した。(a) 学習者が，L1 と L2 で具体的にどういった言語機能をルール化し，帰納することができるのだろうか。(b) 言語機能を分類できることと，言語機能を理解できることに関連性があるのだろうか。

3. 研究方法と分析

日本人大学生 78 人（TOEIC 平均 577 スコア）に言語分析能力テスト（L1/L2）と文法理解テストの 3 つのテストを実施した。各テスト 20 問 5 つの文法ターゲット（助動詞，否定，前置詞，受動態，時制/相）を設定した 4 択式の問題である。参加者の大半は海外留学経験がない。L1 言語分析能力テスト(M = 33.55, SD = 2.98)，L2 言語分析能力テスト(M = 19.94, SD =3.95)，文法理解テスト(M = 19.94, SD =3.95)のデータから相関分析で各テストのスコアの相関を調べ，分散分析で各文法ターゲットの回答傾向をみた。L1 と L2 の言語分析能力テスト間には弱い相関(r =.28, df = 77, *p = .015)があり，異なる文法ターゲット間 Auxiliary と Negation ではかなりの相関(r = .54)がみられた。各テストの文法ターゲット間の回答傾向にも有意な差がみられた(F [2, 1124] = 334.60, p < .001, partial η^2 = .82)。

4. 結論

L1 と L2 の言語分析能力テストには相関がみられ，文法項目ごとに言語分析能力（またはその影響）には差があることが示唆された。しかし，別の文法項目同士の相関をみると，より相関があるものもみられたため，文法ターゲットの設定を変えて，更なる研究をする必要がある。また，言語分析能力の得点が低い文法項目が，必ずしも文法理解テストの得点も低いとは言えないことがわかった。その文法項目に関連した言語経験や指導などの影響が考えられそうであった。

Elementary School English Education in Japan and Other Countries

ARAKI, Mayu
Undergraduate Student, Jin-ai University

Keywords: Elementary school English, teacher training, continuity

1. The Purpose of Research

The purpose of this research was to understand the differences in the educational systems of Japan and other countries in regard to class hours, teacher training, teaching methods and the elementary school English education, and learn some implications for the elementary school English education in Japan.

2. The Method of Research

This research is mainly based on literature review of the reports on English education in other countries and in Japan, and the author's own elementary school class observations and an interview with a Japanese teacher of English.

3. Results

For comparison, the educational systems of Finland, China, Korea, The U.K. and Singapore were chosen. Listing conspicuous points, Finnish education has freedom of choice in what kinds of education students wish to take; In China, English is regarded as important for a rich future; In Korea, competition among students stands out; In the U.K., they are employing various kinds of language activities; In Singapore, they have a *basic stage* and an *orientation stage*. These countries have different educational systems, but, regardless, their purposes are to teach English effectively.

In the case of Japan, English education started in Meiji era, and now, the MEXT is attempting to change the system of English education to develop students' communication abilities. In class observations and an interview with a teacher, it was found that the pupils were learning English in a good atmosphere, but that there were some challenges.

4. Discussion

There are challenges in Japanese elementary school education in regard to class hours, teacher training and continuity from elementary school to junior high school. To acquire a language, pupils need constant exposure to English. Also, teachers require adequate training to teach English. Furthermore, there is the necessity for a good connection between elementary school English and junior high school English.

5. Conclusion

Learning from good practices in other countries, it is hoped students will be provided with excellent English education, and be nurtured to become solid, international citizens.

Reference

Higuchi, T. (2005).『これからの小学校英語教育―理論と実践』研究社

Effects of Negotiation of Meaning on Lexical Acquisition in Computer-Mediated Communication

ZHANG, Hongxu
Graduate Student, Nagoya University

Keywords: negotiation, lexical acquisition, CMC

1. Background

Interaction Hypothesis (Long, 1996) suggests that negotiation for meaning facilitates acquisition. Many Studies that demonstrated positive effects of negotiation on lexical acquisition (e.g., Ellis & He, 1999) are all conducted in face-to-face situations. Few studies that investigated the same problem in computer-mediated communication (CMC) (e.g., Smith, 2004) also provided supportive evidence for the Interaction Hypothesis, they are, however, not adequate in explaining the differential learning processes that learners engaged in negotiation among non-native speakers and how such negotiation relates to acquisition by detailed text data analysis.

2. The Present Study

The current study investigated the effect of negotiation of meaning among sixteen Japanese EFL learners on their lexical acquisition in computer-mediated communication, especially focusing on the differential learning processes that participants engage in during a single negotiation routine. The study asked participants to work in pairs of two to complete a communication task embedded with previous unknown target words using text chat. A pretest-posttest-delayed test design was adopted to measure the acquisition and retention of the target words. Qualitative analysis of text data was also conducted basing on NNS-NNS negotiation model (Varonis & Gass, 1985) to elaborate on how negotiation relates to acquisition.

3. Results

With more than 2/3 of the target words being negotiated during the communication task and participants engaged in the task making significant progress in lexical acquisition and retention, the result can be interpreted as being clear support for the Interaction Hypothesis. The comparison between list-provided interaction and Interaction learning suggest that both two learning processes occurred in negotiation were effective in facilitating lexical acquisition, with list-provided interaction especially helpful in retention of word recognition. Text data revealed massive usage of strategies such as rephrasing, expansion and deduction testing, which allowed learners to acquire more comprehensible input that facilitates comprehension and acquisition. The data also revealed preemptive input interaction and strategies such as the usage of keyboard symbol, which can be seen as the exclusive features of computer-mediated negotiation.

References

Ellis, R., & He, X. (1999). The roles of modified input and output in the incidental acquisition of word meanings. *Studies in Second Language Acquisition, 21*(2), 285–301.

Examining Japanese Teachers' Use of L1 in English Classes: Frequency, Function, and Reasons Behind Them

IZUMITANI, Tadashi
Graduate Student, Nara University of Education

Keywords: lesson analysis, L1 use, teacher belief

1. Introduction

The main medium for English lessons in senior high schools is English now, and this will be applied to junior high schools in the near future (MEXT, 2013). However, Japanese should not be excluded in the Japanese EFL environment (Sato, 2015).

In this study, I researched Japanese teachers' use of first language (L1), and set up the following research questions:

RQ1. What is the frequency of L1 used by Japanese teachers, and what reasons do they give for using L1 in specific lesson situations?

RQ2. What are the functions of L1 used by Japanese teachers, and what are their reasons for using L1 to accomplish these functions?

2. Methodology

Three Japanese English teachers participated in the study. A teaches at a senior high school, and B and C are junior high school teachers. They were all considered to have almost the same English proficiency level. The data was collected in a procedure as follows: lesson recording, interview and questionnaire.

3. Results and Discussion

The result shows that 98.8% of A's utterances, 73.0% of B's utterances, and 35.5% of C's utterances were in English. Although the three participant teachers had almost the same second language (L2) proficiency level, their L2 frequency was clearly different. The interviews and questionnaire show the difference seemed to be due to the difference of their perceptions of difficulty for conducting lessons in English. For L1 function, *activity instruction* was used the most often among the teachers, followed by *explanation* and *translation*. Examining the questionnaire and the interviews, I found that their L1 functions were influenced mainly by teachers' beliefs towards L1 and L2 use in the classroom.

4. Conclusion

I examined L1 use of English teachers, whose English proficiency levels were almost the same. I found that, even with almost the same L2 proficiency levels, teachers' L1 use frequency and functions varied. Considering the findings from the subsequent interviews and questionnaires, I concluded that the frequency and functions of L1 and L2 use seemed to be influenced by teachers' beliefs regarding L1 and L2 use.

References

MEXT. (2013). *The English education reform plan corresponding to globalization*.

Sato, R. (2015). The case against the case against holding English classes in English. *The Language Teacher, 39*, 15–18.

第二言語語彙習得における受容的・産出的検索練習の効果
―英語疑似単語と手の動きの組み合わせの学習に関して―

柳沢 明文
信州大学大学院生

Keywords: transfer appropriate processing, vocabulary learning, testing effect,

1. はじめに

これまでの心理の記憶研究において，検索 (retrieval) の記憶に与える影響が研究されてきていて，第二言語の語彙学習においても検討が行われている。本研究では，イラストと組み合わせた疑似英単語の学習における検索の効果を検討した Yanagisawa (in press) の追研究を目的として，これまでに学習したことのない手の動きと組み合わされた英語疑似単語を学習する場面において，産出的な単語検索練習と受容的な単語検索練習の効果を調べた。

2. 方法

リサーチクエスチョンは，(1) 受容検索条件は統制条件と比較して効果的か。(2) 産出検索条件は統制条件と比較して効果的か。(3) 受容検索条件と産出検索条件はどちらが，どのように効果的か。の 3 つであった。

実験は参加者内計画で，日本人大学生 18 人が，統制条件・受容検索条件・産出検索条件の 3 条件で英語の手話と結び付けられた疑似英単語 21 個を覚える練習を行った。直後と1週間後に，受容語彙知識と産出語彙知識を測定するテストが行われた。

3. 結果と分析

データはテスト別に反復測定分散分析にかけられた。受容語彙知識テストでは交互作用は見られなかった。練習条件の効果[$F(2, 34) = 22.781$, $p = .000$]と，テスト時期の効果[$F(2, 34) = 93.403$, $p = .000$]はそれぞれ有意であった。Holm 法を用いた下位検定の結果，受容検索条件が最も有意に成績が良く[産出検索条件との比較：$t(17) = 6.611$, $p = .000$, 統制条件との比較：$t(17) = 4.154$, $p = .001$]，続いて統制条件，最後に産出検索条件の順であった[産出検索条件と統制条件の比較：$t(17) = 2.900$, $p = .010$]。

産出語彙知識テストでは，練習条件とテスト時期の交互作用[$F(2, 34) = 8.127$, $p = .002$]が有意であった。単純主効果を検討した結果，直後テストにおいて練習条件間に有意な差[$F(2, 34) = 13.966$, $p = .000$]が見られたが，遅延テストにおいては見られなかった。直後テストの下位検定の結果，産出受容条件は受容検索条件よりも有意に高く[$t(17) = 5.102$, $p = .000$]，統制条件との比較でも有意に高かった[$t(17) = 4.082$, $p = .001$]。一方，受容検索条件と統制条件との間には有意な差は見られなかった[$t(17) = 0.778$, $p = .140$]。

4. 考察と結論

受容検索は受容語彙知識の学習により効果的であり，産出検索は産出語彙知識の学習により効果的であった。また，受容検索は，産出語彙知識には効果が低く，産出検索は受容語彙知識には効果が低かった。検索は検索対象の語彙側面の学習を促進するが，検索のもととなる語彙側面の学習は思い出す際の手掛かりとして役に立つ最低限しか行われない可能性が示唆された。

参考文献

Yanagisawa, A. (in press). The effects of receptive and productive word retrieval practice on second language vocabulary learning. *KATE Journal.*

理学療法士を調査対象にした ESP ニーズ分析
―調査結果を養成校の英語教育につなげるために―

小林 信子
名古屋学院大学大学院生

Keywords: 理学療法士養成校の英語教育, 医療専門職の ESP, ニーズ分析

1. はじめに

理学療法士は, 日本社会の高齢化と国民の健康志向の高まりを背景に, 活躍の場が医療から福祉や介護の分野へと広がり, 社会の要請に応じて養成機関の拡充や高度化が進んできた。文科省による 2014 年の調査では, 理学療法士養成校は厚労大臣指定養成所を含めて 276 校あり, その多くで英語が必修科目とされている。生徒の主たる学習目的は, 国家試験に英語の出題がないこともあり, 就職後に必要となる英語能力の習得にある。いっぽう, 理学療法士の職場にあって英語が係る状況とそこで生じる業務の遂行に必要な英語能力について両方の知識を有する者は少なく, その点が養成校での ESP 教育実践の足かせとなり, ESP 研究においてはニーズ分析の進展をはばむ一因となっている。そこで本研究は, 初期の試みとして臨床理学療法士を対象にタスクを単位とする三段階構成のニーズ調査を行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は, (a)先行研究が挙げる ESP ニーズの検証と新たなニーズの割り出し, (b)調査者の理学療法に係る専門知識の不足をカバーする調査手法の試み, (c)医療専門職全体の ESP 実践のデータベースとなり得る系統的ニーズ研究に向けた提言を行うことである。

3. 調査計画と実施

本研究は, 養成校の英語学習者のニーズは理学療法士が医療現場で感じる英語ニーズであると定義し, 調査対象者を現役の臨床理学療法士とした。また調査者が理学療法の専門知識に欠ける点を考慮し, アンケート調査の前後に聞取り調査とヒアリングを実施する調査計画を立てた。聞取りには半構造化面接法による個別調査を用いた。アンケート調査は二部構成の質問紙を用い, 前半で回答者の英語教育経験等を問い, 後半ではニーズを多面的にとらえるために 4 種のニーズ概念について各々10 種のタスクを立てて 5 件法で回答を求める方式とした。さらにデータ分析後にベテランの理学療法士によるヒアリングを実施した。

4. 結果と考察

先行研究と本研究の比較では, 結果が合致するもの・しないものの間で度数に大きな開きがみられた。また, 新たにニーズが高まったタスク, 勤務先によるニーズ差が過大で職場が医療機関か福祉介護色の強い施設かで慎重な分析を要するタスクもあった。こうした差は, 調査対象者を理学療法士に絞った点に加え, 時代変化と情報伝達手段の発達が大きく影響していると考えられる。いっぽう, ほとんどの養成校は医療英語(ESP)と一般目的の英語(EGP)を必修科目とするが, 理学療法士による授業評価に開きが示され, 今後はニーズ分析に応じ, 双方が協力してシラバスの内容を相互補完する調整が望ましい。なお今回は愛知県を調査地としたが, 散発的な調査では養成校の所在地や種別・英語科目の履修期間や内容によりバラつきが大きく拡がると推測する。川越(2001)が示唆する, 医療専門職全体と個別職域のニーズ分析を系統的に行うことができる調査手法の確立と研究者の連携が望まれる。

参考文献

川越栄子 (2001).「医学部、看護学部における ESP 教育の一考察」*Journal of Medical English Education, 2*(1), 75-80.

PPP や TBLT で日本の中学生に英文法を教える方法

石橋 征典
三重大学学生

Keywords: PPP, TBLT, 文法

1. 序論

序論では，文法指導に対する自分の考えについて触れて，私がこのテーマを選んだ理由やこの論文を通して明らかにしたいこと，及び，調査内容についての概略を述べる。

2. 伝統的 PPP 教授法の現状

新出文法事項の形式・意味・用法を生徒に理解させることは，生徒が英語の4技能（話す，書く，聞く，読む）を身につけるうえ重要である。この章では，PPP を説明→練習→活動の 3 つに分けて，それぞれの段階において，生徒が形式・意味・用法を理解しやすいような授業作りの方法について考察していく。PPP の長所は，生徒が英語を使い活動をする前に，文法説明を行うことにより，英語を使うことに対する不安を軽減することができる点であると私は考える。しかし，その反面，活動前に文法指導を行うことで生徒が自由に英語を使いコミュニケーションをする機会を奪っているのではないか，という声もある。その問題を解決する手段について述べる。

3. タスクと TBLT の研究

この章では，タスクの定義とTBLTの特徴について説明し，TBLTをプレタスク→タスクサイクル→事後指導の3つに分けて，それぞれの段階における指導方法や留意点，及び適切なタスクの選び方を考察していく。TBLT では，教師は活動前に文法指導を行わず，生徒に言いたいけど言えなかった表現があることを気づかせ，文法を学びたいと生徒に感じさせてから，文法指導を行う。TBLT は生徒に文法を学ぶことの重要性を体験的に理解させる上で効果的であるが，日本で TBLT を用いることには様々な問題がある。そうした問題を解決する方法を考察していく。

4. 改良版 PPP と TBLT の指導案

この章では，中学生に比較表現を教えることを想定し，これまでの章で明らかになった PPP や TBLT の問題点を改善した指導案を，PPP バージョンと TBLT バージョンの2つ作成する。伝統的 PPP 教授法の問題点は，教師が日本語で文法を説明するので，生徒が英語に触れる機会が少ないという点である。その問題を解決するために，オーラルイントロダクションやオーラルインタラクションを取り入れる。他にも，よりよい授業作りを行うために工夫した点について述べる。

5. 結論

結論では，これまでの章で見てきたことから，教師はどのような授業をしていけばよいのかについて私の意見を述べる。

小学校外国語活動で生きるティーム・ティーチングの在り方
—HRT と ALT へのインタビュー分析を中心に—

千足 奈津紀
大阪教育大学学生

Keywords: ティーム・ティーチング，半構造化インタビュー，授業づくり

1. 研究の目的

文部科学省は 2014 年，小学校における英語指導に必要な基本的な英語音声学，英語指導法，ティーム・ティーチングを含む模擬授業，教材研究，小・中連携に対応した演習や事例研究等の充実に向けて取り組むことが必要だと述べている。しかし，ティーム・ティーチングを行うにあたり打合せの不十分さ，「一緒に」行う事前準備不足，意志疎通を図りきれない等の課題が見られる。本研究では，HRT と ALT の理想とするティーム・ティーチングに近づける方法を考察し，どのようにすれば HRT と ALT のギャップを埋め，より良い外国語活動の授業作りを行うことができるのかを研究したい。

2. 研究の方法と実践

(1) HRT (2 名) と ALT (2 名) への半構造化インタビューを行う。結果をディスクリプトにおこし，KJ 法を活用し互いの理想とするティーム・ティーチング像を探る。(2) ティーム・ティーチングを仮定した授業実践。小学校 6 年生を対象に、筆者が ALT 不在の場合でも出来るティーム・ティーチングを実践し，ビデオ観察を行う。

図 1. 活動中黒板

3. 結論

(1) 半構造化インタビューでは HRT，ALT どちらも理想とする授業の項目では「楽しい授業にしたい」と共通しているが，実際授業をする上で考えなくてはいけない「どちらが T1 を行うのか」「教材づくりは誰が行うのか」等打ち合わせのことや授業づくりについて等は決めきれていないことがわかった。 (2) 授業実践での ALT の効果的な活用としては，オールイングリッシュでの筆者との Interaction や日本と外国の季節行事の違いに気づかせる場面とした。子どもの感想は「ハロウィンがドイツでは 2 月にあって驚いた。」「大晦日に花火があっていいなと思った。」等であった。

今回の研究では ALT，HRT の理想とするティーム・ティーチング像は「楽しい授業にしたい。」と共通しているが，時間等の制限により課題が残っているということがわかった。しかし(2)授業実践より，子どもにとって生の英語を聞くということは楽しく，成功感を感じることが分かった。45 分の授業全てをティーム・ティーチングで行うことは難しいが，ある一つのアクティビティだけでもティーム・ティーチングを取り入れられると良いと考える。

参考文献

文部科学省 (2014).「今後の英語教育の改善・充実方策について　報告（概要）～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」